

『愛玩動物看護師カリキュラム準拠教科書2巻 動物病理学/動物薬理学』

(改訂第2版第1～4刷) 訂正とお詫び

掲載記事中、以下の記述に誤りがございました。ここに訂正させていただくとともに、読者の皆様および関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

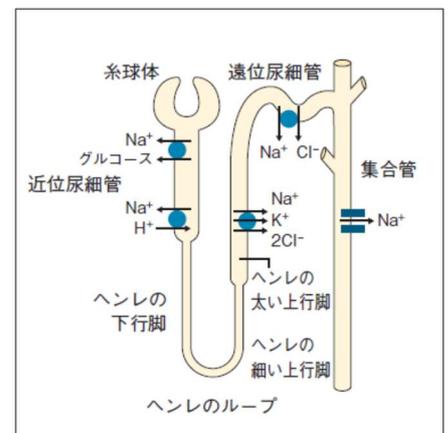
株式会社 EDUWARD Press

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
p.4	第1章「動物病理学の基礎」	左段上から 5、6行目	7巻動物内科看護学・動物臨床検査学 第2章2「血液検査」を参照	7巻動物内科看護学・動物臨床検査学 第5章2「 <u>病理組織</u> 検査」を参照
p.20	第1章「動物病理学の基礎」	図1-1-9 解説文	好酸性の細菌塊	好 <u>塩</u> 基性の細菌塊
p.34	第2章「傷害と細胞死」	左段上から 2、3行目	メラニン細胞に由来する	<u>メラノサイト</u> に由来する
p.72	第4章「循環障害」	左段上から 14行目	糖タンパク(GP) II b-III aの	糖タンパク(G <u>p</u>) II b-III aの
p.75	第4章「循環障害」	左段上から 25行目	脾臓、腎臓、脳、下肢などに	脾臓、腎臓、脳、 <u>四</u> 肢などに
p.80	第4章「循環障害」	表1-4-3「局所性」上から 2列目「リンパ性水腫」の右列	リンパ節廓清	リンパ節 <u>郭</u> 清
p.83	第4章「循環障害」演習問題	問1の④	下肢の静脈～	<u>後</u> 肢の静脈～
p.84	第4章「循環障害」解答	問1 解答、解説	下肢の静脈にできた血栓がはがれると、脳塞栓症を生じることが多い。 下肢の静脈にできた血栓が栓子となる場合、下肢の静脈から後大静脈、～	<u>後</u> 肢の静脈にできた血栓がはがれると、脳塞栓症を生じることが多い。 <u>後</u> 肢の静脈にできた血栓が栓子となる場合、 <u>後</u> 肢の静脈から後大静脈、～
p.113	第6章「腫瘍」	左段上から 5行目	腫瘍の末期では、	<u>悪性</u> 腫瘍の末期では、
p.120	第6章「腫瘍」	表1-6-6「悪性腫瘍」列の上から 2行目	腺癌 adenocarcima	腺癌 adenocarcin <u>o</u> ma

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
p.122	第 6 章「腫瘍」	表 1-6-7「良性腫瘍」列「中枢神経」行「神経膠細胞」行の上から 1 行目	星状膠細胞腫 astrocytoma	星状膠細胞腫 astrocytoma ※rは1つ。
p.134	第 7 章「先天異常」	左段上から 12 行目	ニセヘリポリ	<u>カリフォルニアバイケイソウ</u>
		2. 「発生異常と奇形」右段上から 2 行目	はいほう 胞胚 ※読み仮名の誤り。	ほうはい 胞胚
		2. 「発生異常と奇形」右段上から 8 行目	はいがき 胎芽期 ※読み仮名の誤り。	たいがき 胎芽期
p.136	第 7 章「先天異常」	右段上から 3、4 行目	非対称性分離重複体(結合体)、対称性非分離重複体(無心体)	非対称性分離重複体(無心体)、対称性非分離重複体(結合体)
p.137	第 7 章「先天異常」演習問題	問 3 の②	発生初期に形成される胚胞期を器官形成期という	発生初期に形成される <u>胞胚</u> 期を器官形成期という
p.156	第 2 章「動物薬理学の基礎」	COLUMN 右段上から 6 行目	Gs: アデニル酸～	G _s : アデニル酸～ ※sは下付き。
		COLUMN 右段上から 8 行目	Gi: アデニル酸～	G _i : アデニル酸～ ※iは下付き。
		COLUMN 右段上から 10 行目	Gq: ホスホリパーゼ～	G _q : ホスホリパーゼ～ ※qは下付き。
		COLUMN 右段上から 13 行目	G12: 小分子量～	G ₁₂ : 小分子量～ ※12は下付き。
p.158	第 2 章「動物薬理学の基礎」	左段上から 2 行目	キニジン	キニ <u>一</u> ネ
p.174	第 2 章「動物薬理学の基礎」	表 2-2-4「主作用」列上から 4 行目	消化管運動抑制	消化管運動抑制 <u>作用</u>

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
p.177	第2章「動物薬理学の基礎」	表2-2-5「薬物」列の上から9行目	LSD-25、メスカリン、シロシピン	LSD-25、メスカリン、シロシ <u>ピン</u>
p.181	第2章「動物薬理学の基礎」	問1	正解④ 細胞質内受容体	正解④細胞質内受容体 ⑤核内受容体
p.190	第3章「神経系に作用する薬」	表2-3-2上から1行目の欄	(カフェイン、デオプロミン、テオフィリン)	(カフェイン、 <u>テ</u> オプロミン、テオフィリン)
p.190	第3章「神経系に作用する薬」	表2-3-2上から2行目の欄の2行目	鎮静薬：バルビツール誘導体、 α 2アドレナリン作動薬、ベンゾジアゼピン系薬	鎮静薬：バルビツール誘導体、 α 2アドレナリン作動薬、ベンゾジアゼピン <u>誘導体</u>
p.193	第3章「神経系に作用する薬」	左段上から1行目	(神経節、神経-骨格筋接合部)	(神経節、 <u>運動</u> 神経-骨格筋接合部)
p.200	第3章「神経系に作用する薬」	COLUMN 右段上から6行目目	主に α 作用に基づく～	主に α_1 作用に基づく～ ※ α の後に下付きの1が入る。
p.200	第3章「神経系に作用する薬」	表2-3-5の薬物列の上から14行目	グアネシジン	グアネ <u>チ</u> ジン
p.202	第3章「神経系に作用する薬」	表2-3-7の上から4行目	抗コリン薬	<u>ムスカリン受容体遮断薬</u>
p.209	第3章「神経系に作用する薬」	左段上から18、24行目、右段上から5行目	図2-3-17A 図2-3-17B 図2-3-17B	図2-3-17 <u>a</u> 図2-3-17 <u>b</u> 図2-3-17 <u>b</u>
p.214	第3章「神経系に作用する薬」	図2-3-20解説文上から1行目	運動神経(NS)	運動神経 <u>刺激</u> (NS)
p.215	第3章「神経系に作用する薬」	図2-3-21解説文上から3行目	GABAには～	GABA <u>受容体</u> には～
p.229	第4章「呼吸器系に作用する薬」 「1.呼吸興奮薬」	左段上から8行目	繊毛	<u>線</u> 毛

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
p.229	第4章「呼吸器系に作用する薬」	右段上から12行目	H ⁺ 濃度 (pH)の上昇	H ⁺ 濃度の上昇 (pHの低下)
p.231	第4章「呼吸器系に作用する薬」 「2.鎮咳薬」	左段上から1行目	繊毛運動	線毛運動
p.233	第4章「呼吸器系に作用する薬」	表 2-4-2 上から7行目	プロスタグランジンF _{2d}	プロスタグランジンF _{2α} ※下付きの2の後は下付きのα。
p.234	第4章「呼吸器系に作用する薬」 「3.抗喘息薬(気管支拡張薬)」	左段上から13行目	テルブタミン	テルブタリン
p.238	第4章「呼吸器系に作用する薬」 演習問題	問4の①	抗コリン薬	ムスカリン受容体遮断薬
p.240	第4章「呼吸器系に作用する薬」 解答	問4 解答	抗コリン薬	ムスカリン受容体遮断薬
		問4 解説 5行目	～抗コリン薬は	～ムスカリン受容体遮断薬は
p.249	第5章「循環器・泌尿器に作用する薬」	右段上から9行目	僧房弁閉鎖不全症	僧帽弁閉鎖不全
p.253	第5章「循環器・泌尿器に作用する薬」	図 2-5-8 図内の名称	ワナの下行脚 ワナの上行脚	ヘンレの下行脚 ヘンレの細い上行脚 ヘンレの太い上行脚



頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
p.266	第 6 章「消化器に作用する薬」	左段上から 10、11 行目	ガストリンG(CCKB) 受容体を～	ガストリン(CCK _B) 受容体を～ ※Gは削除。Bは下付き。
p.270	第 6 章「消化器に作用する薬」	右段上から 4、5 行目	ジオクチルソディウムスルホサルシネート	ジオクチルソディウムスルホサ ク シネート
p.286	第 7 章「オータコイド、内分泌・代謝系の薬」	左段上から 4 行目		※以下文章追加 <u>ACE 阻害薬の副作用はヒトではブラジキニンの増加による咽頭の違和感や空咳などが知られている。犬では降圧作用に伴うふらつきや虚脱に注意する。</u>
p.286	第 7 章「オータコイド、内分泌・代謝系の薬」	左段上から 13、14 行目	AT1 受容体遮断薬にはロサルタンやカンデサルタンがあり、	AT1 受容体遮断薬には <u>テルミサルタン、ロサルタン、カンデサルタン、オルメサルタン、アジルサルタン</u> があり、
p.286	第 7 章「オータコイド、内分泌・代謝系の薬」	右段上から 2～5 行目	また、ACE 阻害薬で見られるような空咳(ブラジキニン濃度の増加が原因)は、受容体遮断薬では起こらない。	<u>削除</u>
p.291	第 7 章「オータコイド、内分泌・代謝系の薬」	右段上から 9 行目	アセトアミノフェンもヒトでは	アセトアミノフェンも <u>COX を阻害し解熱鎮痛作用を示すが、抗炎症作用が弱い</u> ためNSAIDs <u>には分類されない</u> 。ヒトでは
p.294	第 7 章「オータコイド、内分泌・代謝系の薬」	「3. 糖尿病治療薬」「糖尿病の病態」上から 14～16 行目	ヒトの1型糖尿病に一致する組織所見も認められてはいるが、主体は2型糖尿病である。しかし、その発症機序には不明な点が多い。	ヒトの1型糖尿病に <u>近いと考え</u> られてはいるが、 <u>結論が出ていない</u> 。その発症機序には不明な点が多い。
p.294	第 7 章「オータコイド、内分泌・代謝系の薬」	右段上から 4、5 行目	アルカボース	ア ル カルボース
p.336	第 10 章「化学療法薬」	右段上から 7、8 行目	PSK(クレスチン)、レンチナン	<u>削除</u>
p.337	第 10 章「化学療法薬」	図 2-10-2 図内の名称	リボゾーム	リ ボ ゾーム
p.337	第 10 章「化学療法薬」	表 2-10-5 「薬物」列の上から 3 行目	シクロルボス	<u>ジ</u> クロルボス

頁	記事タイトル	該当箇所	誤	正
p.354	第 10 章「化学療法薬」演習問題	問 1 の①	シクロホスファミド、メトキサレート、アクチノマイシンD	シクロホスファミド、メト <u>レキサート</u> 、アクチノマイシンD
p.357	索引	「あ」2 列目 上から 12 行 目	アルカボース	ア <u>カル</u> ボース
p.360	索引	「し」上から 3 行目	ジオクチルソディウムスルホサルシネート	ジオクチルソディウムスルホサ <u>ク</u> シネート